トランスナショナルな家族にみる“つながり”の生成と再編：パキスタン人男性と日本人女性の国際結婚の事例から

(Re)Creating “Relatedness” through a Transnational Family: Case Studies of Pakistani Migrants and Their Japanese Wives

工藤　正子　Masako Kudo

生のつながりへの想像力 4

Kyoto Working Papers on Area Studies No.77
(G-COE Series 75)

March 2009

このグローバル COE ワーキングペーパーシリーズは、下記 G-COE ウェブサイトで閲覧する事が出来ます
(Japanese webpage)
http://www.humanosphere.cseas.kyoto-u.ac.jp/staticpages/index.php/working_papers
(English webpage)
http://www.humanosphere.cseas.kyoto-u.ac.jp/en/staticpages/index.php/working_papers_en

©2009
〒606-8501
京都市左京区吉田下阿達町 46
京都大学東南アジア研究所

無断複写・複製・転載を禁ず

論文の中で示された内容や意見は、著者個人のものであり、
東南アジア研究所の見解を示すものではありません。

このワーキングペーパーは、JSPS グローバル COE プログラム (E-4) :
生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点　の援助によって出版されたものです。

トランスナショナルな家族にみる“つながり”の生成と再編：パキスタン人男性と日本人女性の国際結婚の事例から

工藤　正子

生のつながりへの想像力 4

Kyoto Working Papers on Area Studies No.77
JSPS Global COE Program Series 75
In Search of Sustainable Humanosphere in Asia and Africa

March 2009

トランスナショナルな家族にみる“つながり”の生成と再編：

パキスタン人男性と日本人女性の国際結婚の事例から*

工藤正子**

（Re）Creating “Relatedness” through a Transnational Family:

Case Studies of Pakistani Migrants and Their Japanese Wives

Masako Kudo

This paper examines a newly emerging pattern in transnational living arrangements observed among Japanese-Pakistani mixed marriages. By examining these transnational family practices and the fluidity and uncertainty that accompany them, the paper explores a shifting notion of “family”, as well as the hopes involved couples project upon future generations. In addition, it finds that within this newly emerging pattern in transnational families, one encounters conflicting desires and images in regards to the “family”.

This paper draws mainly on in-depth interviews carried out since 1998 with 40 Japanese women married to Pakistani migrants, and it is divided into three sections: The first section points to an increase of these mixed couples in Japan since the 1980s and situates this phenomenon in new patterns of international marriage observed in Japan over the last two decades. The second section provides a brief description of how from the early stages of marriage the Pakistani husbands develop new ties to their natal families even as they maintain existing ones. The third section focuses on a recently emerging pattern in living arrangements which extends beyond the suburbs of Tokyo to a transnational space in which Japanese mothers and their children cross national borders while their Pakistani husbands remain in Japan to send remittances to family members scattered across the world. It then goes on to examine the complex factors which lead to this type of transnational dispersion of family members and explores what kind of “relatedness” is imagined or constructed within its setting.

---

* 本稿は、2008 年 11 月 4 日に開催された「G-COE イニシアティブ４．生のつながりへの想像力：再生産再考」研究会での発表内容に加筆したものである。

** 東京大学大学院総合文化研究科，助教.

はじめに
１．問題の背景
２．トランスナショナルな家族の再編
　　１）パキスタンの夫方親族を訪れる旅
　　２）日本への親族の呼び寄せ
　　３）送金がつなぐもの
３．国境を越える日本人母親たち
　　１）トランスナショナルな家族：その要因の複合性
　　２）家族の流動と再編：可能性と制約のなかで
おわりに

はじめに

本稿は、1980 年代以降の日本に次第に増えてきた日本人女性とパキスタン人男性の結婚を事例としてとりあげ、そこに形成されるトランスナショナルな家族について考察するものである。これらの夫婦のあいだで近年注目されるのが、子どもが就学期を迎えた段階で、国境を越えて分散する家族が増えつつあることである。居住パターンとしては、夫が日本でビジネスをつづけ、妻が子を連れてパキスタンの夫方親族または第三国で生活し、相互に移動を繰り返すというものである。従来の家族が言語や国籍などの同質性を前提としてきたのに対し、トランスナショナルな家族の形成をとおして、差異を内包する“家族”(Erel 2002) が、日本を拠点としても生まれつつある。

本稿では、このように生成されるトランスナショナルな家族のパターンとそれらを規定する社会・経済的諸条件を整理するとともに、国境間の移動に媒介される、「家族」としてのつながり方の再生産や創造について考察する。そのために、第 1 章で、これらの組み合わせの国際結婚が増加してきた社会的背景を簡単に述べたあとで、第２章では、結婚初期にみられるパキスタンとのあいだの親族の関係の維持、構築について、送金もふくめて検討する。第３章では、日本人の妻と子が国境を越えて移動し、パキスタン人の夫が日本を拠点にビジネスをつづけるという新たな家族の分散についてとりあげる。なお、以下の議論は、筆者が 1998 年以降、おもに関東圏でパキスタン人男性と結婚した日本人女性 40 名を対象として行ってきた聞き取り調査およびモスクなどでの参与観察の結果をもとにしている。

１．問題の背景

国内における日本人の結婚で、相手が外国籍のケースは 1980 年代以降に急増し、1965 年には全体の 0.4％（250 組に 1 組）にすぎなかったのに対して、2005 年には、5.8％（17 組に 1 組）となった。東京都ではその割合はとくに高く、9.2%に達している（厚生労働省大臣官房統計情報部 2007)。単に国際結婚の件数自体が増加しただけでなく、そのパターンも大きく変化してきた。まず、日本人男性と外国人女性との結婚の割合が大きく増加したことにくわえ、日本人女性と外国人男性の場合については、相手国が多様化したことが変化の特徴として挙げられる[1]。その背景要因の一つとしては、1980 年代以降の外国人労働者の増加と滞日長期化があるといえるだろう。

日本人女性とパキスタン人男性との結婚は、こうした新たなマリッジ・スケープ(Constable 2005) の一部を構成してきた。この組み合わせの結婚数の増加は、パキスタン人の外国人登録者の内訳のひとつである「日本人の配偶者等」の保有者数から推測することができる（工藤 2008：53)。法務省の『在留外国人統計』によれば、その数は、それが記録され始めた 1980 年代前半より徐々に増加し、1990 年代に入ってとくにその傾向は著しく、2000 年には、外国人登録者 7,498 人中 1,630 人となった。また、同年には 546 人が「永住者」の資格で滞日し

[1] 『人口動態統計』(厚生労働省大臣官房統計情報部 2007) によれば、日本人女性の国際結婚の相手は、1960 年代には「米国」が約半数を占め、「韓国・朝鮮」「中国」と合わせると全体の 9 割以上にのぼったのに対して、1970 年代以降、「その他の外国」との組み合わせが徐々に増加し、1990 年代にはいってその傾向はいっそう顕著となった。

ており、その多くは、「日本人の配偶者等」のビザから移行した人々であると考えられる。

このような増加の背景として、1980 年代後期の日本のバブル経済期にパキスタンから来日した男性たちと、日本人女性たちの出会いがある[2]。他のイスラーム圏からの来日者と同じく、これらの男性たちの圧倒的多数が 20 代から 30 代の男性で占められ、その多くが関東圏を中心に小規模な工場や建設現場などに就労したとみられている。調査対象者の夫たちは、カラーチーや、ラーホールといった都市部出身者の相対的に多いことが特徴である。「貧しい国からの出稼ぎ者」というステレオタイプ的なイメージに対して、彼らは都市部で一定の教育を受けた中間層の出身であるケースが少なくない。また、来日理由も、一般的に想定されるような出稼ぎだけでなく、外国を見てみたいという願望や、親の決めた結婚からの逃避なども挙げられている。五十嵐泰正（1999）が示したように、彼らを「出稼ぎ労働者」としてのみ捉えることは、若者として彼らが抱いてきた来日動機やその滞日生活の多面性を見落とすことになるだろう。

さらに、パキスタンの夫たちの出身地で行った聞き取り調査（1999 年）の結果からは、家族の中から出稼ぎを送り出すことが経済戦略として有利とみられる一方で、パキスタン社会において、非イスラーム圏に対する「堕落した」社会というイメージや、そして、海外移住者に対して、家族、とくに老後の親をみないとする批判的な見方があることも明らかとなった。このように海外出稼ぎに対する相反するイメージがせめぎ合うことを背景に、来日した男性たちは、合同家族への送金を続けることで、本国においては不在でありつつ、「良き息子」「頼りがいのある兄」としての地位を確立してきたといえるだろう。

２．トランスナショナルな家族の再編

それでは、これらのパキスタン人男性たちと日本人女性との結婚は、パキスタンの親族との関係の再編にどのような意味をもったのだろうか。日本人との結婚は、パキスタン人男性たちに、「日本人の配偶者」として日本に居住し、働く権利を付与しただけでなく、パキスタンと日本との間を親族が相互に往還するトランスナショナルな家族のネットワークを生み出してきた。以下ではまず、結婚初期における、国境を越えた往還のおもなパターンをみておきたい。

１）パキスタンの夫方親族を訪れる旅

結婚初期のパキスタンへの渡航のパターンとしては、まず、夫の在留許可申請のため、夫婦でパキスタンの夫の合同世帯に長期滞在したケース（40 組中 12 組）が挙げられ、妻の滞在期間は、半数以上が半年以上の長期に及んでいる。合同世帯は、基本的には父系傍系型で構成される。つまり、結婚は原則的には夫方居住であるため、女性は婚出し、親、男兄弟とその妻子、および未婚のキョウダイが同居するという居住形態がとられている[3]。

---

[2] パキスタン人を含む在日ムスリムと日本人の婚姻数の推移や国別の特徴については、Kojima（2006）に詳しい。

[3] しかし、実際のところ、合同世帯の構成は、単に家族のライフサイクルのみならず、パキスタン国内の都市化や海外移民などによって多様な形態をとる（Donnan 1997）。

結婚初期に夫方親族のもとで滞在した経験をもつ日本人女性配偶者たちがよくいうのが、「短期でパキスタンに滞在するときには『お客さん』だが、長期では『お嫁さん』になる」ことである。つまり、日本人女性たちも次第に「バフー（息子の妻）」や「バービー（兄弟の妻）」として位置づけられ、合同世帯におけるジェンダーや年齢を軸とする権威体系の中で、その立場によってふさわしい振る舞いや役割を担うことが期待される（工藤 2008：35-39）。

やがて、夫婦に子どもが生まれると、子が小さいうちにウルドゥー語や「ムスリムとしての基本」を身につけさせることも、パキスタンを訪問する理由のひとつとなることが多い。滞在中に子どもの誕生を祝うアキーカ[4]の犠牲が行われたり、男児の割礼が行われたりしている。この時期には、夫の母親などからクルアーンの読み方を習うなど、子をムスリムとして社会化する「家族」の単位が、夫婦だけでなく、パキスタンの夫方親族をも包括するようになることが注目される。これに対して、日本の妻方の親は、孫に対して情緒的紐帯は形成するが、「宗教のことには口を出さない」ことが多く、ムスリムとしての教育には距離を置く傾向が強い。

2）日本への親族の呼び寄せ

夫が日本で在留許可を得ると、親族の呼び寄せが可能となる。よく聞かれる来日パターンの一つが、夫の合同世帯の出稼ぎ人員の補充として、または、自営業を始めた夫の手伝いやビジネス・パートナーとして男性親族が来日するケースである。

パキスタン社会において「よく知らない身内の外」と縁談が、親族集団のイッザト（名誉）を脅かすものとして懸念されていると同様に[5]、ビジネス・パートナーについても「身内」でない人間は避けられる傾向が強い。「信用できる」として選ばれた甥、イトコなどを海外の取引地点に派遣したり、いったん来日してビジネスを手伝った兄弟がパキスタンに帰国後に新たな拠点を設立したりなど、男性親族を各地に分散させることで、ビジネス・ネットワークを拡大する例も多く、そうしたネットワークの形成は後述する妻子の第三国への移住とも関わっている。

しかし、以上のようなパキスタンとの新たな往還には制限がないわけではない。まず、経済面で、渡航費や親族へのみやげ物代のため、家族単位でのパキスタンへの頻繁な渡航は経済的負担とみられることも少なくない。くわえて、親族、とくに労働年齢の男性を日本に呼び寄せるためのビザの取得は容易ではないなど、受け入れ国の入国管理による制約もある。

3）送金がつなぐもの

Rijk van Dijk （2002）が指摘したように、移民の送金は、「豊かな」世界に移動した「個」の単位が揺れ動き、送り出し社会との関係が再形成される過程を知る手掛かりとなる。上述のような国境を越えた親族間の移動にくわえ、結婚後もパキスタンへの送金が継続されている場合は多い。定期的な生活費送金の必要がとくにないケースでも、親のハッジ（マッカ巡礼）や、イード（イスラームの祭り）で動物犠牲をする費用を送ったり、キョウダイの結婚

[4] 「アキーカ」は、イスラームで子どもの誕生の際に行われる羊の犠牲の儀式を指す。

[5] こうした婚姻をめぐる通念などを背景に、日本人女性との結婚にも両義的な眼差しが向けられていることについては、工藤（2008：73-78）を参照されたい。

費用を部分的に負担するなどの行為を通して、日本で得られた収入の分配は継続的に行われている。

送金の額や頻度は、日本での夫婦の経済状態や、パキスタンの家族構成、そして、夫が長男かどうかなどによって異なるが、いずれにしても、日本からの送金は、パキスタンの合同家族が収入源を国内外に分散させて経済的リスクを軽減しようとする「家族戦略」（五十嵐1999）としての意味合いにくわえて、親族との紐帯を維持・強化し、また、対外的にガル全体の社会的地位を引き上げるという象徴的意味合いをも持ち続けている。

しかし、単身時は生活費を節約することで一定額を送金できていたのに対し、結婚後の送金は難しいと感じられるケースは多い。結婚直後には妻が働いていた場合も、出産後は多くが退職して、育児役割を担うために男性だけの収入で家計を賄わなければならなくなるという事情もある。送金が経済的に難しくなると、前項で述べたように、送金を維持するための手段として、合同世帯のなかで労働年齢にある男性を日本に呼び寄せたり、日本以外の国に出稼ぎに送り出す方法がとられるケースもある。

こうした送金について、日本人女性配偶者たちはどのように受けとめているのだろうか。その見方は女性たちのあいだでも決して一様ではないが、夫が「家族を大切にする」ことが一部の女性たちにとっては結婚の一つの決め手でもあったのに対して、結婚後の「仕送り」や呼び寄せの問題を通して、夫の家族観との齟齬を痛感するケースは少なくない。そのことは、ある女性の「パキスタン人の男性は『大黒柱』にはなれない。彼らには、妻子のほかにめんどうをみるべき家族がたくさんいるから」という言葉にも示唆されている。

３．国境を越える日本人母親たち

冒頭で述べたように、これらの国際結婚による家族形成で、近年、注目されるのが妻子でパキスタンあるいは第三国に移動し、夫は日本を拠点にビジネスを継続し、仕送りをするという国境を越えた家族の分散の傾向である。多くの場合、夏に妻子が日本に帰国し、一方で、夫は、イード（イスラームの祭り）や親族の結婚、あるいはビジネスの目的も兼ねてパキスタンや第三国の妻子を訪問するという往還のパターンがみられる。調査対象の夫婦の居住パターンは複数あるが[6]、調査対象者 40 名中、妻が子を連れてパキスタンに移動し、または過去にそうした経験をもつケースは計 10 例あり、第三国[7]について、同様の例は計 2 例ある。このように、国境を横断する家族形態が選択される背景には、どのような要因があるのだろうか。

１）トランスナショナルな家族：その要因の複合性

[6] 現段階では、次の５つを主なパターンとして挙げることができる。①夫婦と子が日本で単独世帯を構える（滞日する夫方親族が同居することもある）。②夫婦と子が日本国内で妻方の親と同居する。③（全て、または一部の）子だけをパキスタンの夫の家族に預け、学校に通わせる。④夫は日本で働き、妻と子がパキスタンや第三国で滞在する。⑤妻子がパキスタンに移動した後、夫も合流し、全員がパキスタンで生活する。

[7] 第三国としては、夫のビジネスの取引先が選ばれることが多い。これまで筆者が知る例としては、アラブ首長国連邦（U.A.E.）や、英国、ニュージーランドなどがある。

a. 宗教的アイデンティティの再生産

こうした居住形態を選択する理由として最初に挙げられることが多いのが、日本で子をムスリムとして育てることの難しさである。家庭によっても、場合によっては夫婦間においても[8]、何を理想的なムスリム教育とし、非イスラーム圏での教育において、どこで折り合いをつけるかについての見解は異なりえるが、その多くが抱える課題として、少なくとも次の３点を挙げることができるだろう。

第一に、日本における子育てのもっとも基本的な課題としては、給食でハラームな（イスラームで禁じられている）食品を避けることや、一定の年齢に達した子どもの断食、そして、女児の制服や体操着をどうするか、などが挙げられているが、日本の公教育内部でのイスラームへの公的で特殊な対応（規定）はなく（杉本 2002: 155)、個別の学校や職員の判断、および各家庭の自助努力に委ねられているのが現状である。

第二に、一般的に、日本の教育現場では「日本人」としての均質性が想定されがちであり、同じ「日本人」でありながら、ムスリムとしては他の児童とは異なることに対する周囲の理解が得られにくいという課題がある（工藤 2008:181-184; Maruyama 2007:66)。

第三に、とくに夫に関しては、子育ての仕方が明確にジェンダー化されている場合が多く、息子なら日本で教育してよいが、娘に関しては、将来の結婚を視野に入れたうえで、日本社会の「性の乱れ」の悪影響にさらされることを危惧してパキスタン行きを望むケースが多い[9]。

b. 英語という言語の獲得

パキスタンに妻子が移動する例では、二国間の経済格差を利用し、日本で得た外貨で子どもをパキスタンの「有名校」に入れ、英語教育をうけさせるケースが多い[10]。Vuorela (2002: 78-81) は、移民と教育の関係について、「エリート層や上昇志向の強い移民にとって教育は、子の成長を身近に見られる家庭環境を代償にしても投資する価値がある最高の象徴的、社会的資本なのである」と述べ、さらに、そこに植民地時代の植民地主義の影響や継続があることを指摘している。英語を操ることが「学歴の高さ（educated)」と同義とされ、社会的地位のきわめて重要なシンボルとなっているパキスタンでも、子を英語媒介（English medium）に入れるという投資は、社会的上昇を可視化させることにつながる。ただし、「良い学校」を決める基準は家庭の方針や子の性別によっても異なり、例えば、欧米系の学校のモラルを問題視する見方もある。

c. パキスタンという場のもつ意味

---

[8] パキスタン人との結婚を通じてイスラームに改宗する日本人女性たちが、その後の過程において、夫からは自律的な「日本人改宗ムスリム」としてのアイデンティティを構築していること、およびそのプロセスに介在する複合的な差異や力関係については、工藤（2008）で詳述した。

[9] イスラーム社会での娘のセクシュアリティの管理が、究極的には結婚時の娘の「純潔性」の確保にあり、それが親族集団の名誉にかかわる問題とされていることはすでに指摘されているとおりである（大塚 2000: 111; 中山 1998: 117)。

[10] これに関して、日本の英米系インターナショナル・スクールが可能性として挙げられることもあるが、それらは、英語習得の点で利点があるものの、「欧米のモラル」への懸念に加え、費用と通学距離が問題とされ、多くの場合は実現可能な選択肢とはされていない。

子にパキスタンでの教育を望む理由には、家族の親愛の情や、親や目上の人への尊敬など、「パキスタン的なもの」を教えたいという夫の願いもある。上述のように、英語という言語が、将来的に息子が経済手段を獲得したり、娘が結婚市場で優位に立つための重要な資源とされる傾向があるのに対し、父親の母語を習得することは、日本で生まれた子どもが父親やパキスタンの家族との紐帯を形成するために重要と見なされている。

くわえて、「いずれはパキスタンで暮らしたい」、「パキスタンに『ふるさと』、つまり、家族が集まれる場所を残しておきたい」という希望に示唆されるように、親族が海外に分散する中で、パキスタンはなお、多くの夫たちにとって家族の紐帯を維持する場としての意味を持ち続けている。

d. その他の諸要因

国境を越えた家族の分散の背景には、このほかに、国家間の経済格差を最大限に利用するという経済的意味合いもある。また、夫や子が「外国人」や「ハーフ」として、生活の様々な側面で経験する差別が、生活拠点を日本以外に移すことにつながるケースもある。さらに、被雇用の夫たちに関しては、加齢にともなう肉体労働のきつさに加え、日本語の読み書きが壁となって、職場での階層上昇が望めないことも今後の生活拠点を検討する要因となっている。しかし、パキスタンで経済基盤が確保できるか否かについては慎重に検討されており、そのことが、まずは学齢期を迎えた子どもと妻がパキスタンに移る理由ともなっている。

2）家族の流動と再編：可能性と制約のなかで

以上、トランスナショナルな家族の生成に寄与する複合的な要因について検討してきた。夫たちが子育てについてとる立場は決して一枚岩ではなく、また、そうした立場は、ライフサイクルの進行にともない、上に挙げたような諸要因がどのように変化し、何が優先づけられるかによっても変化する。さらに指摘しておきたいのは、1990 年代以降、こうした居住パターンは調査対象者のあいだで漸増しているものの、一方で、家族の分散がその後、固定的な居住パターンとして定着するのではなく、妻子が日本に戻るケースも少なくない点である。前述のように、調査対象者 40 人のうち、これまで妻子だけが、長期滞在を目的としてパキスタンおよび第三国に渡航した例は 12 例あるが、そのうち、日本に帰国した例は 6 例にのぼっている。

その背景要因のひとつには、妻子がパキスタンや第三国で直面する問題が挙げられよう。パキスタンの場合には、パルダ（男女隔離）[11]の慣行からくる成人女性の移動の制約や、日本人女性が夫の合同世帯内の権威体系において経験する周縁性や難しさなどがある（工藤 2008：222-226）。

第三国に移住する場合には、それらの国々が経済的な先進国であることから、パキスタン

[11] パルダとは、「カーテン」を意味し、思春期を迎えた女性を、あるカテゴリー以外の男性から隔離する実践を指し示す。男女を隔離し、とくに男性の欲望を誘発するとされる女性のセクシュアリティを管理するための社会的手段として理解され、南アジアで広く認められる慣行であるが、ムスリムの間では、宗教的に正当化され、近親者以外の男性から女性を隔離する実践を指す。しかし、パキスタン社会のなかでもその実践は決して一枚岩的ではなく、地域や階層などによって差異があると同時に、諸要因を受けて変化を遂げている。

と比較してさまざまな点で暮らしやすいとされる傾向があるが、そこで女性や子どもたちは、ビザの問題のほか、「アジア人」としての差別など、新たなかたちの困難にも直面することにもなる。

日本社会のモラルの低さなどが問題視される一方で、近年のパキスタンのモラルの低下を危惧する夫たちもいる。長く離れている間に故国に生じた変化や、キョウダイの結婚など、本国の家族構成の変化なども夫とパキスタンとの心理的距離の変化につながっている。一方で、老いつつある親を看るという義務感は依然として強く、選択は夫の中でも揺れているといえるだろう。

おわりに

以上、パキスタン人男性と日本人女性との国際結婚を契機に形成される、トランスナショナルな家族の再編プロセスをみてきた。調査対象者のあいだで、実際に国境を越えて分散している家族は、決して多数派ではないものの、そうした居住形態は、多くの家族にとって常に現実的な選択肢として視野に入れられているといってよいだろう。その背景にある諸要因を検討すると、これらの夫婦の“家族”としてのつながり方への期待や、それを子にいかに継承するのかという問題、そして、それをめぐる夫婦間での共鳴と齟齬が浮き彫りになってくる。また、こうした家族の形態は、決してある方向へ固定化されていくのではなく、むしろ、その形態がきわめて流動的であることに特徴があり、そこには、トランスナショナルな空間でこれらの夫婦のおかれた可能性と制約の双方がうつしだされているといえるだろう。

滞日 20 年を経た夫たちの多くにとって、パキスタンは、「家族」を築き、次世代へつなぐ磁場としての意味を持ち続けている一方で、その距離や関係の質は、合同家族のサイクルが進行し、親やキョウダイとの結びつきが変化するなかで変わりつつある。日本とパキスタン、あるいは第三国のどこに自らを位置づけるか、または、どのようにトランスナショナルな関係性を維持、あるいは再編していくのかについては、成長しつつある子どもたちの結婚を契機に変化していくことも予想される。いずれにしても、そこには、受け入れ国への定着か、本国への帰還かという二項対立的な移住パターンには還元できない、常に複数の地点のあいだを還流するトランスナショナルな移動（Hugo 2005）がみられる。個別の状況において、そうした複雑な軌跡を規定する社会・経済的な諸条件を明らかにすると同時に、そこに反映され、あるいは再編成されていく「家族」としてのつながりのかたちを理解していくことが求められている。

参照文献

五十嵐泰正. 1999.「元日本就労パキスタン人労働者の移動の軌跡ー『外国人労働者問題』を越えてー」『移民研究年報』6：21-41.

工藤正子. 2008.『越境の人類学：在日パキスタン人ムスリム移民の妻たち』東京：東京大学出版会.

厚生労働省大臣官房統計情報部. 2007.『人口動態統計 2005 年』（上巻）. 厚生統計協会.

大塚和夫. 2000.『近代・イスラームの人類学』東京：東京大学出版会.
杉本均. 2002.「イスラーム教徒における社会文化空間と教育問題」『変容する日本社会と文化』〔国際社会 2〕宮島喬・加納弘勝（編）, 145-168 ページ所収. 東京：東京大学出版会.
中山紀子. 1998.「トルコの女性ー世俗主義とイスラーム主義のはざまでー」『女の民族誌 2』綾瀬恒雄（編）, 93-118 ページ所収. 東京：弘文堂.
Constable, Nicole. 2005. Introduction: Cross-Border Marriages, Gendered Mobility, and Global Hypergamy. In Nicole Constable ed, *Cross-Border Marriages: Gender and Mobility in Transnational Asia*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press, pp.1-16.
Donnan, Hastings. 1997. Family and Household in Pakistan. In Hastings Donnan and Frits Selier eds, *Family and Gender in Pakistan: Domestic Organization in a Muslim Society*. New Dehli: Hindustan Publishing Corporation, pp.1-24.
Erel, Umut. 2002. Reconceptualizing Motherhood: Experiences of Migrant Women from Turkey Living in Germany. In D. Bryceson and U. Vuorela eds, *The Transnational Family: New European Frontiers and Global Networks*. Oxford: Berg, pp.127-146.
Hugo, Graeme. 2005. Migrants in society: diversity and cohesion. A paper prepared for the Policy Analysis and Research Programme of the Global Commission on International Migration. URL: http://www.gcim.org/attachements/TP6.pdf#search='Graeme Hugo' (2009年2月12日閲覧).
Kojima, Hiroshi. 2006. Variations in Demographic Characteristics of Foreign “Muslim” Population in Japan: A Preliminary Estimation, *The Japanese Journal of Population*, 4(1): 115-130.
Maruyama, Hideki. 2007. Diversity as Advantage in a ‘Homogeneous’ Society: The Educational Environment for Muslims in Japan, *Shingetsu Electronic Journal of Japanese-Islamic Relations*, Vol.1, March 2007, pp.57-78.
Vuorela, Ulla. 2002. Transnational Families: Imagined and Real Communities. In D. Bryceson and U. Vuorela eds, *The Transnational Family: New European Frontiers and Global Networks*, Oxford: Berg, pp.63-102.
van Dijk, Rijk. 2002. Religion, Reciprocity and Restructuring Family Responsibility in the Ghanaian Pentecostal Diaspora. In D. Bryceson and U. Vuorela eds, *The Transnational Family: New European Frontiers and Global Networks*, Oxford: Berg, pp.173-196.